The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「V1＋込む」の多義分析における多使用論的アプローチの有効性についての検討
Author(s)	蘇, 暁笛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88338
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「V1＋込む」の多義分析における
多使用論的アプローチの有効性についての検討

蘇　暁笛

1. はじめに

日本語の語彙的複合動詞の中に、「～込む」と結合する前項動詞の数が一番多く、特殊な存在であると多くの研究で言及されている (姫野 1999、松田 2004、陳・松本 2018) 。例 (1) ～ (4) のように、「V1＋込む」は前項にくる動詞の意味特徴、使用文脈によって、全体の意味解釈が異なる。

(1) 粒ジャムは、なるべく外側に出ないように生地の中に入れ込む。[1]
(2) さらに磨き込むことで鏡面のような光沢が得られます。
(3) 私の年で痩せると、一気に老け込むのがこわいのですが、サイズダウンしたおかげで、今まで諦めていたショップの服も着れるようになり、若返った気がします。
(4) a. 売り上げは 08 年は 5400 万円、今年は 7000 万円を見込んでいる。
b. このツアーが気にいったかたは、フリーの日にどきどきの動物探検系のツアーも申し込むと良いと思います。

例 (1) では、「粒ジャム」という「移動物」、「生地の中」という「移動先」、また、必須項ではないが、「外側に出ないように」という目的が文脈上明示されている。「入れ込む」という行為によって、「粒ジャム」が「生地の中」から出ないようにするという事柄を表す。それに対し、例 (2) (3)では、「移動物」、「移動先」が存在せず、「移動」とは考え難い。例 (2) の「磨く」は「～込む」と結合することによって、「磨く」という行為をしっかりするという意味を表す。例（3）では、「移動」より、V1「老ける」という激しい「状態」への変化を表すと考えられる。例 (4) の「見込む」、「申し込む」における前項動詞「見る」、「申す」と後項動詞「～込む」の意味関係が把握しにくく、2 つの動詞の組み合わせより、ひとまとまりの 1 語として用いられていると考えられる。

以上からわかるように、後項動詞「～込む」は我々が思ったより複雑かつ豊かな意味を持つ。「V1＋込む」における前項動詞と「～込む」はどんな意味関係を持つのか、また、「V1＋込む」はどんなコンテクストの中で用いられるのかは興味深い課題である。

以下、第 2 節では従来の多義研究に用いられる理論的アプローチ (2.1) 、および本稿と主に関連する先行研究を概観する (2.2) 。第 3 節では、日本語複合動詞「V1＋込む」の多義を扱う場合、多使用論的アプローチを援用すべき理由を述べる (3.1)。また、中国語を母語とする日本語学習者が作成した誤用例を分析し、「V1＋込む」の使用条件を検討する (3.2) 。

---

[1] 本稿で提示した例文は特に断りがない限り、すべては Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版) から収集したものである。なお、例文中の下線は筆者によるものである。

最後に 4 節にて結語および今後の課題を述べる。

2. 理論的枠組みおよび先行研究の概観

多義語の意味構造をどう扱うか、どのように多義語の意味を記述するのかに関しては、研究者によって異なる。2.1 節では、多義研究に関する主な理論的アプローチ、「一括主義的アプローチ」、「細分主義的アプローチ」、「多使用論的アプローチ」について紹介しておきたい。2.2 節では、日本語複合動詞の意味と結合制限に関する先行研究を概観する。

2.1. 多義研究に関する理論的アプローチ

2.1.1. 一括主義的アプローチと細分主義的アプローチ

従来の研究において、多義語の扱い方は、細分主義と一括主義に大別できる。細分主義は語彙項目の各種の用法の細かな違いに注目し、語の指示対象が変わるごとに語義の数を増やしていく立場をとっている。それに対し、一括主義は語彙項目の各種用法の共通点を抽出し、抽象度の高い意味にまとめる。より具体的な用法は語用論的推論、コンテクスト的な要因から生じたものであると考えられている。

Lakoff は細分主義の立場をとる代表的な研究者である。 Lakoff (1987) では、open という語彙項目の多義について考察している。 Lakoff (1987) によれば、「ドアを開ける (open) 」、「プレゼントを開ける (open) 」において、「開ける (open) 」が表す行動は異なり、2 つの語義を持っていると主張している。一方で、一括主義的アプローチをとる Searle はこのような捉え方を認めず、open の直接目的語に現れる事物の性質によって、open は異なる意味になるという考えに従えば、open の意味が無節操に増えていくのではないかと指摘している (Searle 1983) 。 Searle (1983)によると、我々は「ドアを開ける (open) 」という文を正しく理解できるのは、ドアというものの構造、使い方、目的に関して我々がよく知っており、また、ドアを開けるという行為が我々の日常生活の中で何度も繰り返し、慣習化されたためである。逆に、「山を開ける (open) 」という表現が容認されないのは、その事柄は我々の慣習的行為として存在しないためである。従って、Searle (1983)は記憶の負担を最小限にするため、open という語の意味を 1 つにまとめ、具体的な解釈は「背景 (the Background) 」[2]に基づく推論に任せばいいと主張している。

しかし、第二言語習得の立場から考えると、一括主義的アプローチもいくつかの問題がある。学習者にとって、すべての使用例から抽出した共通する単義の抽象度があまり高くなると、類義語との違いがわからなくなる可能性がある。また、言語共通の「背景」によって、うまく推論できる場合もあれば、言語によって同一物に対する認識が異なり、うまく推論できない場合もある。

[2] 世界の仕組み及び世界と我々の関わり方のことを指す（Taylor 2012＝西村他編訳 2017: 342）。

2.1.2. 多使用論的アプローチとメンタル・コーパス

平沢 (2019) は英語の前置詞 by を考察対象とし、多くの研究者によって論じられてきた「多義論」の問題点を指摘し、新しく「多使用論」を提案した。平沢 (2019: 3) によると、現代英語母語話者が by を問題なく使用できるのは、従来の「多義論」に基づく構築された by の多義ネットワークの知識を知っているからではなく、「by をどのように使うと（たとえばどのような単語と一緒に使うと）どのような内容が伝達できるのかについての個別知識」を知っているからである。言い換えれば、ある語彙項目の「意味」を知っているとは、ある語彙項目の「使用・使い方」を知っていることなのだという主張である。平沢 (2019) は、このような語彙項目の「使用・使い方」を重視する理論的アプローチを「多使用論」と名付けた。また、「［TIME］までに」と対応づけられてきた by の時間用法 by［TIME］を多使用論に基づき、 (5) のように記述している。

(5) a. by［TIME］とは：抽象的記述
by［TIME］は、時間軸を［TIME］よりも前から目で追っていき、［TIME］で目をとめ、そこでどのような状態が成り立っているかを語るための形式である。
b. by［TIME］の具体的特徴 1：時間軸を「目で追う」ことの目的
［TIME］より前から始まった変化の結果状態を語ることが多いが、［TIME］よりも前に見られた状態が［TIME］においても依然として成り立っていることを語る場合もある。
c. by［TIME］の具体的特徴 2：修飾する動詞句の状態性
by［TIME］が修飾する動詞句は、原則として状態性動詞句を取る。［TIME］が未来である場合には、非状態性動詞句も認められるが、その場合でも［TIME］
においてその動作の結果状態が成立していることが文意の焦点となる。
(平沢 2019: 61)

このような「使用」こそが「意味」なのだという考えは Taylor (2012) が提示したメンタル・コーパスという概念に基づくと考えられる。Taylor (2012) によると、我々が言語表現と接するたびに、その言語表現および言語表現が用いられる際のコンテクストが我々の記憶に残る。ある語彙項目をうまく用いられるか否かは、これまでに言語に接した経験によって決まるのである。これに基づき、Taylor (2012) は「語を記述するには、その語がどのような意味を表しどのような対象を指示できるかに加えてコンテクスト特性 (contextual profile) を明らかにしなければならない」と主張している (Taylor 2012＝西村他編訳 2017: 333)) 。ここでのコンテクスト特性 (contextual profile) は具体的に以下のものを指す。

(6) (ⅰ)どのような語とコロケーションをなすか
(ⅱ)どのような構文に現れるか

(iii)どのようなテクストに生じるか

(Taylor 2012＝西村他編訳 2017: 333)

しかし、このような多使用論的アプローチに基づき、ある語彙項目の「使用・使い方」を記述する際に、具体的にどんな情報を含むべきか、また、どこまで記述するべきかは記述される語彙項目の特徴によって異なるだろう。

2.2. 日本語複合動詞の意味と結合制限に関する先行研究

日本語複合動詞の意味と結合制限に関する説明するには、これまで様々な扱い方がされてきた。項構造に基づき、日本語の語彙的複合動詞の組み合わせを説明する「他動性調和の原則」 (影山 1993) 、前項動詞と後項動詞の主語が同一物を指さなければならない「主語一致の原則」(松本 1998、由本 1996)、前項動詞と後項動詞の語彙概念構造 (LCS) の合成性による説明 (由本 2005) 、背景知識を含むクオリア構造の合成性による説明 (由本 2013) 、コンストラクションに基づく日本語複合動詞の構文的意味に関する分析 (野田 2011) などが挙げられる。ここでは本稿と主に関係あるフレーム意味論の観点から、複合動詞の意味制約を考察する陳・松本 (2018) について紹介しておきたい。

陳・松本 (2018) はコンストラクション形態論とフレーム意味論 2 つの理論的枠組みを組み合わせ、フレーム・コンストラクション的なアプローチを用いることにより、日本語複合動詞の意味と体系分析を行なっている。日本語複合動詞の成立には以下の 2 つの制約が存在すると主張している。

①日本語の複合動詞のスキーマには、特定の複合事象スキーマのテンプテートが存在し、このテンプレートに特定の動詞が合致することで、複合動詞が成立する。
②テンプレートに当てはめられた 2 つの動詞は、1 つの整合性を保った「語彙的意味フレーム」を構成する必要がある。

(陳・松本 2018: 4)

陳・松本は①②をそれぞれ「コンストラクションの制約」、「語彙的意味フレームの制約」と名付けている。その中、特に、「語彙的意味フレーム」という概念を用い、複合動詞の結合制約や意味形成など様々な問題を説明できると主張している。

では、例 (7) を通し、意味フレームの役割を見ていきたい。

(7) a. 試験で「論文形式で答えるように」という回答形式の部分を｛読みおとして／??読みのがして｝箇条書きで答えてしまった。 (陳・松本 2018: 158)
b. 電光掲示板に流れている文字を読み逃した。 (陳・松本 2018: 162)

例 (7a) の文脈では、「読みおとす」を「読みのがす」に書き換えると文全体が不適格になる。これは、表 1 が示すように、前項動詞「読む」と後項動詞「のがす」の意味フレームに何らかの不整合性が生じたからである。

V1V2「??読みのがす」		
	V1「読む」	V2「のがす」
中心事象	【認知主体】が【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る	【捕獲者】が【対象】を捉えることに失敗する
事象参与者	【認知主体】:【目】で【文字列】を【視線】で追うことで【情報】を受け取る人。 【情報】:【文字列】から【認知主体】が受け取る知識。 【目】:【認知主体】の身体部位の一つで，ものを見るための器官。 【文字列】:文字で構成された【情報】を含む試験用紙。 【視線】:【目】と見る対象を結ぶ線。	【捕獲者】:【対象】を捉えようとする意思的な主体。 【対象】:【捕獲者】が捉えたい逃げるもの。
関連事象	前提的背景 (【文字列】は通常読み返せるため逃げない) ⋮	前提的 (【捕獲者】は【対象】を捉えようとしている；【対象】は逃げようとしている；…) 結果 (逃げる【対象】が捕獲不可能な状態になる) ⋮

不整合

表 1：例 (7a) における不整合性 (陳・松本 2018: 163 (表 9))

一方で、例 (7b) のように、「読みのがす」がとる目的語を、一度読む機会を逃してしまうと二度と読めなくなる性質を持つ「電光掲示板に流れている文字」に書き換えると、文全体として容認されるようになる。つまり、不整合が生じた部分を整合性のある文脈要素で埋めることによって、容認度が上がるのである。

動詞の意味フレームにおける関連事象には、表 1 の前提的背景、結果に加え、原因、手段、理由、感情・感覚、様態、共起事象、付随音などが含まれる。しかし、これは固定化されておらず、認知主体の主観的判断によって後付け的に設定しているのではないかと考える。これに関して、陳・松本 (2018: 156) は語彙的意味フレームの情報にはある程度の流動性があると答えている。つまり、関連事象の情報は人それぞれの言語経験の違いによってある程度個人差が存在し、その差によって、複合動詞に対する容認度が異なる場合がある。

ここでの「意味フレーム」は前述した「コンテクスト特性」と似たような性質を持っているのではないかと考える。多使用論的アプローチによる意味分析とフレーム意味論に基づく意味分析との違いが曖昧であるため、それぞれの特徴を明瞭化する必要がある。

3.「V1＋込む」の意味から「V1＋込む」の使用条件へ

本節では、まず容認度が低い、また容認されない「V1＋込む」の使用状況を見た上で、従来の捉え方ではなく、多使用論的アプローチに基づき、「V1＋込む」の使用条件に注目するべき理由について述べる (3.1) 。また、日本語学習者によって作成された誤用例を分析した上で、「V1＋込む」の使用条件を解明するには何が不可欠であるのかを検討する (3.2、3.3) 。

3.1. 「V1＋込む」の使用条件に注目する理由

蘇 (2021) では、「V1＋込む」の意味を以下のような 3 つのパターンに分けている。

(8) パターン 1：＜ある領域の内部へ移動し、固着する＞
（入れ込む、乗り込む、飲み込む、など）、
パターン 2：＜V1 が表す行為を十分に行い、何らかの結果状態に達する＞
（走り込む、磨き込む、使い込む、など）
パターン 3：＜V1 が表す状態の程度が激しい・深い＞
（黙り込む、話し込む、考え込む、など）

また、大量の実例を分析した結果、各パターンにくる前項動詞は以下のような特徴を持っていると主張している。

(9) パターン 1：「一回きりの動作性動詞」
パターン 2：「量的変化によって質的変化が起こりやすい動作性動詞または起こりにくい動作性動詞」
パターン 3：「未完了動詞に近い特徴を持つ安定した状態性動詞」

しかしながら、例 (10) のように、以上で提示された前項動詞の性質を満たしているものの、「～込む」との結合が容認されにくい項目の存在を無視してはいけない。

(10) 吐き込む、炒め込む、数え込む、調べ込む、脱ぎ込む、迎え込む、抜き込む、揚げ込む、眺め込む、疑い込む、驚き込む、など

例 (10) のような Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）に収録されておらず、一見容認されないような語彙項目の容認性を検証するために、蘇 (2021) は日本語母語話者 10 人に例 (10) のような語彙項目を 36 個提示し、容認性判断してもらった。その結果、36 個のうち、28 個は一部の回答者によって＜場合によっては認められる＞、＜認められる＞と判断された。

その中、「吐き込む」、「炒め込む」、「数え込む」は＜場合によっては認められる＞、＜認

められる＞と判断された語彙項目である。例 (11) 〜 (13) のように、具体的な使用場面、使用文脈を補足することで、容認度が上がり、問題なく意味が通るもののように思われる。

(11) バケツの中に？吐き込んだ。
(12) それに、ニンニクを？炒め込みます。（「料理の途中である材料を炒めて入れる」意）
(13) 3 人ほどパーティに参加するかどうか未定の人がいたが、とりあえず参加者の人数のうちに数え込んでおいた。

（母語話者による作例）

また、例 (14) 〜 (16) のように、同じく「吐き込む」、「炒め込む」、「数え込む」であるが、どのようなコンテクストに使用されるかによってその意味解釈が異なってくる。蘇 (2021) の分類基準によれば、例 (11) 〜 (13) はパターン 1 にあたる語彙項目であり、例 (14) 〜(16) はパターン 2 に属するものである。

(14) あの晩は飲みすぎて数時間トイレで?吐き込んだ。
(15) より香ばしさを出すために、これらの食材を?炒め込んでください。
(16) 息子は覚えるために 1〜100 まで?数え込んでいる。

（母語話者による作例）

このように、「V1＋込む」の意味は固定的で普遍的なものではないことがわかる。伝統的な意味観に基づき、個々の「V1＋込む」それぞれの意味を規定するのが極めて難しいのである。同様に、前項動詞 V1 と「〜込む」の結合が適格か不適格かは単に「V1＋込む」のみを見て、機械的に線引きするのも妥当性に欠けると考えられる。それゆえ、「V1＋込む」の使用実態を適切に把握するには、「V1＋込む」の意味を羅列するのではなく、実際に使用される際に共起する文脈要素や、背景となる知識などの中で考え、「V1＋込む」の「使用条件」に目を向けるべきだと考えられる。

3.2. 「V1＋込む」の使用条件

先述したように、メンタル・コーパスの考えによると、ある語彙項目を使用できるか否かはそれまでの言語経験によって決まるのである。この点は第一言語獲得と第二言語習得に共通していると考えられる。しかし、母語話者と学習者それぞれが有する言語経験には大きな差異があることを看過することはできない。つまり、母語話者と比べ、学習者の場合、その語彙項目に接する機会、また使用頻度が比較的に少なく、限られた言語経験からカテゴリー化、スキーマ抽出、連想などが行われ、最終的に学習者の頭の中に定着した言語知識は不十分または誤っている場合がよくある。それゆえ、実際に使用する際に誤用が生じやすく、その語彙項目の意味を正確に把握しているとは言えない。

「V1＋込む」の使用条件を検討するには、コーパスに収録されている適格な例文以外に、日本語学習者が作成した不適格な例文にも注目すべきだと考える。そこで、本稿は中国語を母語とする日本語学習者を対象とし、「V1＋込む」に関するアンケート調査を行った。アンケート調査の回答者はすべて 5 年以上の日本語学習歴を持ち、日本在住経験がある。以下取り上げる誤用例はすべて (17) の 2 問の回答から収集した例文である。

(17) 問 1 : 普段ご自身が使用している「V1＋込む」の語例およびそれを使った例文をできる限り多く書いてください。
問 2 :「V1＋込む」に対する把握状況[3]をご自身で判断した上で、例文を作成してください。（最低限 1 文）

まず、例 (18) を見てみよう。例 (18a) の使役移動事象は、動作主＜蘇さん＞、移動物＜日本語＞、移動先＜中国人＞が明示されており、文全体としては容認されにくいと考えられる。教える内容が普通の日本語である場合は、単純動詞「教える」で十分であり、あえて複合動詞「教え込む」を用いる必要がないと考えられる。それに対し、例 (18b) のように、「教え込む」が取る目的語、つまり移動物＜日本語＞の前に「変な」という修飾語を付け加えると、文全体の容認度が上がると考えられる。

(18) a. ??最近、蘇さんはネットで中国人に＜日本語＞を教え込んでいます。
（学習者による作例）
b. 最近、蘇さんはネットで中国人に＜変な日本語＞を教え込んでいます。
（筆者による作例）

同様に、例 (19a) では、動作主＜担当の先生＞、移動物＜私＞、移動先＜オフィス＞が明示されており、「呼び込む」の使用が不適格であると考えられる。Web データに基づく複合動詞用例データベース（開発版）のデータから見ると、「呼び込む」がとる目的語は出現頻度が高い順に並べると、「客」、「人」、「運」、「幸運」、「幸せ」になる。その中、「客・人を呼び込む」という行為の目的として、良いサービスなどを提供することが一般的であると考えられる。また、「運・幸運・幸せを呼び込む」の場合、目的語自体が良いモノである。例 (19a) の文脈では、担当の先生にオフィスに呼ばれるということは良いこととは考え難いため、不適格な文になる。一方で、例 (19b) では、「お土産を配る」という良いことを前提として提示し、また、目的語を (19a) のような「私」1 人ではなく、「同僚たち」という複数人に書

[3] 問 2 では、25 個の「V1＋込む」を提示した。「V1＋込む」に対する把握状況は習得状況と使用実態によって判断している。具体的に、習得状況と使用実態をそれぞれ、「①知らない、予測もできない；②知らないが、予測できる；③知っている」、「①全然使わない；②たまに使う；③よく使う」3 段階に設定した。なお、習得状況と使用実態の組み合わせは①①である場合は、例文を作成する必要がない。

き換えると、文全体の容認度が上がるのである。

(19) a. ??私がぼうとしているところ、担当の先生にオフィスに呼び込まれてしまった。
（学習者による作例）
b. 担当の先生が出張のお土産を配ると言ってオフィスに同僚たちを呼び込んだ。
（筆者による作例）

もちろん、「V1＋込む」にくる前項動詞によって、必要となる文脈情報も異なるかもしれないが、以上の「教え込む」、「呼び込む」、2 つの語例に関する分析から、複合動詞「V1＋込む」の使用の容認性を高めるには、移動事象における移動物の性質、移動物の数、移動の目的に関する文脈情報の補足が必要であることがわかった。こういった文脈情報の補足が必要となる理由については、「V1＋込む」の意味形成に含まれる広義の因果関係から説明できると考える。

陳・松本 (2018) は、V1 と V2 の意味関係に基づき、日本語の語彙的複合動詞を 13 種類[4]の意味タイプに分けている。また、これらの語彙的複合動詞においては、多くの場合、広義の因果関係が見られると主張している。ここでの広義の因果関係は原因型の複合動詞のような明らかな因果関係のほか、間接的な因果関係や目的性も含まれると説明している (陳・松本 2018: 100) 。「V1＋込む」も例外ではなく、広義の因果関係が関わっていると考えられる。つまり、V1 が表す事象が原因で、「～込む」が表す状態が結果になる。しかし、V1 が表す事象のみで「～込む」という結果を引き起こしにくい・引き起こさない場合がある。その場合、助力する文脈情報を補足することが必要であると考えられる。

4. 結語と今後の課題

本稿では、一括主義的アプローチ、細分主義的アプローチ、多使用論的アプローチについて概観した上で、「V1＋込む」を正しく使用するためには、意味ではなく、使用条件を知っていることであると論じた。また、学習者による誤用例の容認度を上げるために必要となる文脈要素を確認し、「V1＋込む」の使用条件について検討した。その結果、「V1＋込む」の意味形成に広義の因果関係が含まれるため、移動物の性質、移動物の数、移動の目的など「～込む」という結果状態を引き起すための文脈情報が必要であることがわかった。

「V1＋込む」が表す結果状態は文脈情報によって明示される場合もあれば、明示されない場合もある。明示されない場合、その結果状態が具体的に何を指すのかについて、前項にくる動詞の特徴、使用文脈、また背景知識などからさらに検討していく必要がある。また、

---

[4] 13 種類の意味タイプは原因型（溶け落ちる）、手段型（叩き壊す）、前段階型（割り入れる）、背景型（見落とす）、様態型（舞い落ちる）、付帯事象型（泣き叫ぶ）、同一事象型（抱き抱える）、事象対象型（出し惜しむ）、比喩的様態型（咲き狂う）、派生型（打ち上げる）、V1 希薄型（打ち震える）、V2 補助型（騒ぎ立てる）、不透明型（取り締まる）である (陳・松本 2018) 。

本稿は紙幅の制限により、パターン 1 に属する「V1＋込む」の使用条件のみを考察した。パターン 2、パターン 3 の「V1＋込む」の使用条件については今後の課題としたい。

参考文献

影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京: ひつじ書房.

蘇暁笛 (2021)「日本語複合動詞「V1＋込む」の多義構造と使用条件」―認知言語学の視点からの一考察」修士論文, 大阪大学.

陳奕延・松本曜 (2018)『日本語語彙的複合動詞の意味と体型―コンストラクション形態論とフレーム意味論』東京: ひつじ書房.

野田大志 (2011)「現代日本語における複合語の意味形成―構文理論によるアプローチ―」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.

姫野昌子 (1999)『複合動詞の構造と意味用法』東京: ひつじ書房.

平沢慎也 (2019)『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか: 多義論から多使用論へ』東京: くろしお出版.

松田文子 (2004)『日本語複合動詞の習得研究－認知意味論による意味分析を通して』東京: ひつじ書房.

松本曜 (1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114: 37-83.

由本陽子 (1996)「語形成と語彙概念構造―日本語の「動詞＋動詞」の複合語形成について―」奥田博之教授退官記念論文集刊行会（編）『言語と文化の諸相』105-118. 東京: 英宝社.

由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統合―モジュール形態論から見た日英語の動詞形成―』東京: ひつじ書房.

由本陽子 (2013)「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最前線―謎の解明に向けて―』: 109-142. 東京: ひつじ書房.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作他訳 (1993) 『認知意味論―言語から見た人間の心』紀伊国屋書店.)

Searle. John. (1983) *Intentionality.* Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大訳 (1997) 『志向性: 心の哲学』誠信書房.)

Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press. ((西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) (2017) 『メンタル・コーパス―母語話者の頭には何があるのか―』東京: くろしお出版.)

ウェイブサイト

『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』＜https://shonagon.ninjal.ac.jp/search_form＞

Web データに基づく複合動詞用例データベース (開発版)
＜https://csd.ninjal.ac.jp/comp/index.php＞